

平成29年8月21日

「この人に聞く」成熟社会と建築

古谷 誠章（ふるや・のぶあき）氏

プロフィール 1955年東京都生まれ。現在早稲田大学創造理工学部教授。NASCA 共同主宰。早稲田大学理工学部建築学科卒業後、同大学大学院博士前期課程修了。1986年より近畿大学工学部講師、また文化庁芸術家在外研修員として、スイスの建築家マリオ・ボッタ事務所に在籍。1994年早稲田大学理工学部助教授、八木佐千子氏と共同してNASCAを設立。1997年現職となる。吉岡賞（1991）を始め、JIA新人賞（1999）、日本建築学会賞作品賞（2007）、日本芸術院賞（2011）、日本建築大賞（20XX）など多数受賞。



（前文）

本年5月に（一社）日本建築学会会長に就任された、早稲田大学創造理工学部教授 古谷誠章氏に、建築の本質及び学会長としての展望について伺った。

■建物を設計する上で何が重要か

設計を行う立場として、その建物が建ち上がったときにどのように活用したいと思っているかを的確に把握しなければいけません。これは発注者だけでなく、実際のユーザーとなる、例えば僕が携わった茅野市民館で言えば市民一人ひとりになります。そういう方々の期待を十分に把握することが重要だと考えています。

茅野市民館は、当時50億円の予算、延べ床面積1万㎡以上に及ぶ、地方都市としてかなりの一大事業でした。元々市長が市民協働によるパートナーシップのまちづくりを掲げていたことから、この施設を使うことになる市民ととことん対話してほしいと茅野市より要請がありました。今で言う、ワークショップですね。幸いにも市民館新築を市長に働きかけていた非常に熱心な市民グループがいらして、基本計画をまとめていく段階で2年間。それから実施設計が完了して工事が始まって、管理運営計画として2年間。さらに工事が竣工して、ならし運転をして開館するまで、実際に

運用していくための計画を1年間という具合に延べ5年間にわたり市民協働を行いました。その間、この人たちが一体どのように使いたいと思っているかを、できるだけ確につかみ取ろうと努めました。

一方で建築というものは、必ずしも誰もが100%満足いくのは難しく、何かをやりたいと思えば何かを犠牲にしなければならないといった要件が数多く絡み合っています。多種多様な機能が複合している場合、限られた面積や予算の中でどこかを豊かにしようとする、必ずどこかにしわ寄せがいきます。その際、全体を均等に縮小して何となく中途半端なものをつくるのではなく、残すべきものは残し、諦めるべきものは諦める。諦めるとしても、ただ諦めるのではなく代替するアイデアを様々な視点から検討していく。そういう話合いに時間を費やします。

■新しいニーズに応じて使われ続ける建築

茅野市民館は、可変性のある約700席のホール、図書館の配置、駅との連結といった、ありきたりのものとは違いますから、最初は使うのに随分困惑されたと思います。でも、開館後10年以上経った今では、市民と協働してきた長い道のりが功を奏して、僕たちが思ってもみない使い方を市民たちが工夫して考え出してくれる状態にたどり着いています。建築は100%完璧とはいかないけれど、使い勝手については、自分たちがどう工夫したらよいか考えられるかにかかっている、そういう機運を皆さんがつくり上げていただいたのはとてもよかったと思います。

維持管理についても、建物は10年経てば、当然それなりに老朽化し、当然手を入れなくてはなりません。ひと頃まで官公庁からは公共施設の維持管理費がかからないように、できるだけメンテナンスフリーにしてくれないかという要請が度々ありました。現に今の公共建築物の多くはそういう発想でつくられていると思います。でも、これは半分正解で、半分は間違いだと言えます。なぜなら、使い方、使い道は日々変わっていくものだからです。使い方が変わってきているのに、全く手をかけずにいれば、たとえ建物がピカピカのままでも、使い勝手が悪いものになってしまう。ですから、10年、20年経っても、そのまま手をかけなくて大丈夫という固定的な考え方より、そこまで固めてしまわずに、5年、10年経ったとき、市民がどのように使いたいかに応じて手を入れていくことができる、やや柔軟なメンテナンスフリーの考え方をしないと、建物が使えなくなってしまっただけでは意味がありません。手を入れながら使い直していく、あるいは何か新しい機能を付加していく考え方も必要なのです。

幸いにも、柔軟な設計が功を奏して、むしろ活発にそれを使いこなしていただいているので、今のところ機能面では大いに活用されていますが、やはり物ですから 10 年経過して、想定以上に多くの方々が来て使ってくれていますから、通常のメンテナンスはもちろん必要です。多少余分にお金をかけてでも、多くの人たちに愛着を持って長く使われ続けられるようにできるのなら、このような考え方も市民の間でも受け入れられると思っています。

■学会長として目指す「良質な建物を次世代へ」

私は 55 代目で、これまで歴代の会長がいらっしゃいますが、初期の頃は別として、実際に設計をする建築学会長はそう多くない。建築学会は、学者、研究者、教育者の集まりですから自然なのですが、敢えてそういう研究教育に携わる方々の間に、実際に設計をする人の観点も持ち合わせていただきたいというのが私の悲願でもありました。長く学会員をしていますが、学会の大会へ行ってもスター建築家がいるわけでもなく、学会賞はあるけれども、それ以外では、建築家が積極的に参加していることは余りない。けれど、建築設計というものによって各分野の知見や知識が統合されて一つの建築が生まれるという、これには構造も設備も、環境もデザインも、様々な意味でのものが統合される必要があるわけで、その設計という概念を是非あわせ持ちたいという思いです。

就任挨拶でも触れましたが、この度ものづくりの立場の私が会長となって、今後の建築界の発展に向けて私の使命を考えますと、一つは、建築学分野の中にある様々な分野が連携して、場合によっては力を携えていくといった建築 5 会¹の連携強化があります。もう一つは、公共施設のユーザーである市民にとって、専門家である我々が責務を果たして、市民が理解、納得できる形で建築が誕生し、それが使われていく状態を目指そうと考えました。これには、学術研究だけではなく、やはり建った建物がそれでよかったのか検証していく姿勢が必要です。建築学会の中には様々な分野があって、新しい環境技術・構造・設計も含めて計画も様々なものが発表されていますが、でき上がったものが果たしてどうだったかという検証は、正直あまりなされていないように思えます。

建築が設計されて誕生する経緯には様々な方法がありますが、公共施設の多くは圧倒的に入札によって設計者が決まっている。しかし、比率は少

¹ (公社) 日本建築士会連合会、(一社) 日本建築士事務所協会連合会、(公社) 日本建築家協会、(一社) 日本建設業連合会、(一社) 日本建築学会

ないものの、コンペ、プロポーザル、あるいはQBS²といった、価格面ではなく資質を評価されて選定される場合もある。あるいは、昨今増加傾向にあるデザインビルドのように、設計と施工を一体化することで適切なコスト管理するものも社会から要請されています。このように、価格だけではなく、多様な評価点を加味していく、様々な発注方式が今試みられています。

ただ、でき上がったものが果たして期待どおりの建築物として実現しているのか。あるいは、10年、20年経過して、うまく初期の期待どおり機能し続けているだろうか。こうした評価をする必要もあるのではないかと。そこで、建築5会のうち、学会以外の四会は主に実務者の団体ですから、少し距離をおいた建築学会という立場で、様々な発注方式やでき上がった建築物をもう一度評価してみたらどうかと。評価、研究を得意とする先生方は多数いらっしゃる中で、耳の痛い結論が出る可能性もありますが、そうした中から市民のニーズに応えるには、本当に入札でいいのかということを考えてみたい。

ある種のプロジェクトでは入札でも十分機能するでしょうが、別のプロジェクトでは市民協働、デザインビルド、コンペティション、プロポーザルが最適かもしれない。こうした検証を行う上でベースになる比較検証を、私の任期中に活動として是非立ち上げたい。幸い、他の四会の会長とも長い付き合いですし、僕は設計という分野から、それぞれの会に直接関係していますので、こういう人間が会長となった今がよい時期と思いました。多様な発注方式はすごく重要なキーポイントだと思います。もう一つが、維持管理において、維持管理費をかけないことだけにとらわれていていいのかということです。少々費用をかけても有効に長く使い続けていく維持管理方法もあるのではないかと。茅野市民館の話にも関連しますが、一方で、人口減少により、多くの公共施設が全国で余って遊休化している現状があって、そういう施設の活用方法も含まれます。建物によって、それぞれ特徴を活かした第二の人生の送り方みたいなものがきっとあるはずで、ただ壊してしまうだけでなく、次の世代に資産としてきちんと受け渡すことができるのです。もう使い道がないから建物を何となく壊す、維持管理費がかかってだめだから潰すだけではない、価値の再生の仕方があるのです。

² QBS(Qualifications Based Selection)は公共建築の設計者を選定する際、実績、経験、能力、人柄等を評価して最適な人を選ぶ「資質評価方式」